

## 2006年 第2回ボルダリングジャパンカップの結果について

埼玉県加須市でおこなわれた日本山岳協会主催による第2回ボルダリングジャパンカップについて、大会終了後にたくさんの抗議と苦情が寄せられております。これについて実質的な責任者であるチーフルートセッターの飯山健治よりお詫びを申し上げたいと思います。

まず一番の問題点は男子の予選課題が、あまりにも難しすぎたという点です。結果を見ると68名の男子選手のうち、実に41名もの方々が1完登どころか1ボーナスポイントも取れなかったという事実です。

通常、ワールドカップ等で行われている同じ形式のボルダリング競技においては、課題のうち最初の1～2本目はやさしめで、多くの参加者が完登できる設定になっております。準決勝進出者は、全完登もしくはそれに近い成績で、後半の課題でのトライ回数の差で決まるのが一般的な流れです。

これについては、チーフのアイデアとして難易度を逆にしてみようという考えでした。つまり最初と最後を難しくして予定調和を崩したかったのです。また壁の構成上、真中の3課題目が1～2課題目をトライ中の選手から見えてしまいます。そこで3課題目を一番やさし目にして、たとえ登りを観察しても参考にならないようにする、という意図もありました。

予選を難しくしたのは、予選であっても複数人が全部一撃するようなルートではなくある程度の難度に設定することで勝敗を分ける課題を多くして、トータルで「向き不向き」を中和させる狙いもありました。特にボルダリングにおけるムーブの「できるできない」は非常にシビアで、セッターの色がどうしても影響してしまいます。その点では今回男女5ラウンドはすべて4人のセッターが各ラウンドで1本以上を担当することで、公平性は保たれていると思います。最終調整は全員で行い、試登の出来不出来に関わらず、すべてチーフであるわたしが課題の最終判断をいたしました。

最大の誤算は初期設定のグレードでした。これまで何度かボルダリングコンペをセットしてきましたが、わたし自身ここ2、3年はまったくボルダリングをおこなっておりませんでした。たまたまに外岩で初段程度を登るぐらいで、ジムでの段クラスは歯が立たないのが正直なところでした。個人的には外岩のグレードを基準にしていたのですが、しばらく世界の現状から離れているあいだに世界レベルでボルダリングの難易度が向上、確定してきているそうです。とくに日本の段級システムは甘い傾向にあるようですが、世界基準に直してもそのグレードで登りこんでいるトップレベルは、初段前後ならば全5課題をギリギリ完登してくると読んでいました。

予選終了後に翌日の男子準決勝は当然手直しをしました。また男子決勝もやさしくする方向で手直ししました。しかし極端にやさしくはしていません。やはり決勝は前のラウンドと同等か少し難しくないと逆転のチャンスがなくなってしまうからです。しかし結果的には男子決勝1本目

のジャミングで勝負がついてしまいました。日々、人工壁で切磋琢磨しているまじめな若者に対して、国際舞台ではありえないあのようなトリッキーな仕掛けやルール規定違反の高所を登らせるスラブ壁やハリボテを制作設定したのはわたし自身です。

ジャパンカップという大会は日本の1番を決める大会であると同時に翌年の日本代表選手を決定する、非常に大事な大会です。そのような場で、一生懸命に努力した選手をないがしろにした罪は大きいと思います。

正直に言います。わたしは男子予選課題を自分の設定した2課題を含めて1本も完登していません。それまでの経験からくるさじ加減とカンだけで「これでよし」と最終決定していました。

これまでルートセッターというのは経験値を高めていくほど、いいルートを設定できるものだと思っていました。実際そのように勘違いをおこしてしまうような偶然が奇跡的に連続して、この13年間気づかずにいたのです。

今やっとわかったことは、セッターの条件というのは1から100まで「登れてなんぼ」という単純なことです。経験値など年寄りの戯言でしかありませんでした。常に決勝進出レベルに自分を高めて保てない人間に曲がりなりにも「国際チーフルートセッター」という役目は務まらないのです。

わたしはこれまで一度もワールドカップで予選通過したこともないし、一度も世界最難レベルのルートに成功したことも、かすったことすらない凡人です。トップレベルを経験したことの無い者がワールドカップに派遣する日本国を代表する選手を決める大会のルートセットをしている。こんな矛盾に目を向けないようにしてきた自分がとても恥ずかしいです。

この夏にマレーシアでのワールドカップチーフセット大失敗に続き、連続の大失敗です。サッカーでいえばイエローカード2枚ということで退場いたします。

チーフルートセッターのライセンスもICCのセッター頭、ジャッキー・ゴドフに返上し、受理されました。今後金輪際、あらゆる公式大会のセットをすることはできません。

どうかみなさん、これで勘弁してください。ほんとうにすみませんでした。

全国の若い選手のみなさん、それぞれの夢をあきらめないで精進しつづけていただけることを祈っております。

ごきげんよう、さようなら。

2006年12月25日

飯山 健治